

(28) ゴボウ
ウ 土壤消毒剤

農 薬 名	成 分 名	RAC コード I:殺虫 F:殺菌	適 用 病 害 虫 名											
			ケ ネ コ ハ セ ネ ネ 萎 黒	キ ガ リ リ ガ ガ リ ガ ネ ム シ 類 幼 虫	ム シ 類 幼 虫	シ ム シ 類 幼 虫	ユ ウ シ 類 幼 虫	セ ン チ ユ ウ シ 類 幼 虫	ネ グ サ レ セ ン チ ユ ウ シ 類 幼 虫	コ ブ セ ン チ ユ ウ シ 類 幼 虫	調 病	あ ざ 病		
ガ ス タ ー ド 微 粒 剤 バ ス ア ミ ド 微 粒 剤	ダゾメット	I:8F									◎	◎		
キ ル パ ー	カーバムトリウム塩	I:8F							◎					
ク ロ ー ル ピ ク リ ン	クロルピクリン	I:8B	◎	◎		◎	◎					◎		
ク ロ ピ ク 8 0 ド ジ ョ ウ ピ ク リ ン ド ロ ク ロ ー ル	クロルピクリン	I:8B		◎		◎	◎					◎		
ク ロ ル ピ ク リ ン 錠 剤	クロルピクリン	I:8B					◎					◎		
ソ イ リ ー ン	クロルピクリン・D-D	I:8B・8A						◎	◎			◎		
ダ ブ ル ス ト ッ パ ー	クロルピクリン・D-D	I:8B・8A						◎	◎	◎	◎			
テ D C 油 剤 D	D-D	I:8A			◎			◎	◎					

エ 病害虫防除法（ゴボウ）

（ア）うどんこ病 *Sphaerotheca fuliginea*

（防除のねらい）

病原菌には6群の寄生性に違いがあり、ゴボウを侵す系統はゴボウとコスモスに強い病原性を示し、ウリ類とアズキには弱い病原性を示すゴボウ型に属するので、これらに注意して防除を行う。夏季高温時、風通しの悪い時ほど下葉から発病するので、この頃の防除を徹底する。

（耕種的防除法）

過度の密植を避ける。

（イ）菌核病 *Sclerotinia sclerotiorum*

（防除のねらい）

病原菌は被害葉に形成された菌核で土壤中に生存し、子う盤を生じて子う胞子を飛散して伝染する。春秋の気温14℃前後で降雨が続くと、子う胞子が飛散し感染に好適な条件となるため、本病の発生が多くなる。本菌の生育適温は25℃で、ゴボウ以外にナス科、ウリ科、アブラナ科野菜など多くの植物に寄生する。防除は早期発見に努め、発病株は早期に除去するなどして、ほ場衛生管理に努め、トンネル栽培は十分に換気を実施し、不織布等で被覆して多湿となる場合には予防散布を行う。

（耕種的防除法）

- （1）被害茎葉上の菌核は伝染源となるので、枯死葉は除去し、ほ場外で土中深く埋めるなど適正に処分する。
- （2）トンネル内の換気を十分行う。
- （3）夏季湛水処理を行う。
- （4）深耕、反転耕を行い、5 cm以上の深さに菌核を埋没させ、子う盤の形成を抑える。

（ウ）黒あざ病 *Rhizoctonia solani*

（防除のねらい）

病原菌は土壌中または被害組織上の菌核、菌糸塊、厚壁化細胞の形で越冬し、土壌伝染する。15℃以上、特に25℃～30℃の高温で多湿な時に発生しやすい。

（耕種的防除法）

- （1）発病ほ場ではイネ科作物を栽培し、ゴボウは3作以上休作する。
- （2）春播き栽培は早播きせず、秋播き栽培では遅掘りを避ける。
- （3）低湿地への作付けは避け、土壌pHは5.5～6.0(KCL)に矯正する。
- （4）被害残渣はほ場に埋めず、外に持ち出して焼却する。

（エ）黒斑細菌病 *Xanthomonas campestris* pv. *nigromaculans*

（防除のねらい）

被害組織で越冬するとともに種子伝染も考えられる。露地栽培では冬季を除きすべての時期に発生するが、トンネル栽培では冬季にも発生がみられる。幼苗期に雨が連続すると多発し、6～7月の長雨は病勢進展を助長する。秋播きは春播きより早くから発生する。

（耕種的防除法）

- （1）発病葉を除去・焼却する。
- （2）輪作を行う。
- （3）排水を良くする。

（オ）黒斑病 *Ascochyta phaseolorum*

（防除のねらい）

病原菌は病葉で越冬し、翌年の伝染源となる。秋季に発生が多く、生育初期に発生するほど被害が大きくなるので、生育初期に重点をおいて防除する。

（耕種的防除法）

- （1）秋季の生育が旺盛になるよう管理する。
- （2）表土を反転する。
- （3）収穫後は被害植物を処分する。

(カ) 根腐病 *Pythium irregulare*

(防除のねらい)

土壌伝染性病害で高温時期に播種するほど発生が多い。降雨が続くと多発傾向にある。本病はピシウム属菌であるが、「ヤケ症」と呼ばれるものには本菌のほか、リゾクトニア属菌、フザリウム属菌、ネグサレセンチュウ等も関連していることがあり、対策は総合的に考える必要がある。土壌消毒はこれらの問題の解決策として最も有効である。

(耕種的防除法)

- (1) 多発ほ場での連作を避ける。
- (2) 排水良好なほ場で栽培する。
- (3) 石灰を施用する。

(キ) 角斑病 *Cercospora arcti - ambrosiae*

(防除のねらい)

病原菌は病葉で越冬し、翌年の伝染源となる。秋季に比較的古い葉または生育不良株に発生しやすい。

(耕種的防除法)

秋播きは10月20日以降に播種する。

(ク) 紫紋羽病 *Helicobasidium mompa*

(防除のねらい)

病原菌は土壌中に長期間生存し、イネ科作物を除く多くの作物を侵す多犯性病害である。発病ほ場では連作を避けるか、土壌消毒をする。

(耕種的防除法)

- (1) 被害植物は早めに持ち出し処分する。
- (2) 消石灰を多量(300kg以上/10a)に施す。
- (3) イネ科作物と4～5年輪作する。

(ケ) アブラムシ類

(防除のねらい)

ゴボウの他キク科植物の若芽での寄生が多い。5月上旬頃から寄生し始め、6月下旬が最も多くなる。秋季に多発することもある。加害によって葉が巻かないうちに防除する。

(コ) ネキリムシ類

(防除のねらい)

ハクサイの項参照

(サ) ハイイロサビヒョウタンゾウムシ

(防除のねらい)

成虫で前年の春播きほ場の土壌中、あるいは周辺の畦畔で越冬し、3月下～4月上旬に越冬成虫が出現する。成虫は4～6月まで見られるが、4月下～5月上旬に最も多く、この時期を中心に防除する。ゴボウ以外のヨモギなど雑草でも生息するので、周辺の畦畔や雑草地を含めた防除が望ましい。

(耕種的防除法)

- (1) 秋播きゴボウは早めに掘り取る。
- (2) 連作を避ける。

(シ) ゴボウネモグリバエ

(防除のねらい)

幼虫態でゴボウの根に食入したまま越冬し、3月に蛹化、成虫は4～11月まで見られる。第1回成虫は4月中～下旬、第2回成虫は6月中旬、第3回成虫は7月下旬で以降継続発生する。

(耕種的防除法)

- (1) 秋播きは10月20日以降に播種する。
- (2) 被害株はほ場外へ持ち出し、処分する。

(ス) センチュウ類

(防除のねらい)

根にこぶを作るネコブセンチュウ類と「やけ」症の原因になるネグサレセンチュウ類がある。殺センチュウ剤で防除する。キュウリのネコブセンチュウの項参照。

(セ) ハスモンヨトウ

(防除のねらい)

ハクサイの項参照。